



新島 襄の言葉

吉海 直人（女子大学学芸学部教授）

射る矢にこむる大丈夫ますらおの意地

明治23年1月5日、新島襄は静養していた大磯おびの百足屋旅館で、迎春の決意を、
いしかねも透れかしてとてひと筋に射る矢にこむる大丈夫

の意地
（『新島襄全集5』408頁）

と詠じている（揮毫は元日か）。この歌の斧正ふせいを乞われた歌人池袋清風は、即座に直情的な部分を穏やかな表現に改め、
岩かねも透れと放つますら雄の心の矢さき神のまにまに
と添削している。これを受けて新島襄は、1月10日付け八重

宛の書簡の中で、

荒々しき歌も大分優美なる風調に相成申、只々も難有奉
存候、私の歌はあらごなしの出来ぬあばれ馬の如し、此
は少しく関東武士の如き風なりと申して可ならん。

（『新島襄全集4』333頁）

と感想を述べている。ここに見られる「関東武士の如き風」とは、米国渡航以前の安中藩士時代への回帰を意味している
のであろうか。それとも純粋な愛国心の発露なのであろうか。

実はこの歌の発想は、昭和十七年に編纂された『愛国百人一首』中に収められている有村次左衛門（勤王の志士）の、

岩が根も砕けざらめや武士ものふの国の為にと思ひ切る太刀
にどこかしら共通しているように思われる。

辞世にも等しい新島襄のこの歌から、同志社人はどのようなメッセージ（遺言）を読み取ればいいのかであろうか。